

刀剣の歴史と思想

第5回

酒井 利信

高祖の斬蛇剣

古代中国の宝剣に関する伝説で見落とせないものに、もう一つ、**高祖の斬蛇剣**の話がある。

漢の高祖は、中国の歴史上もつとも重要な人物の一人であり、彼の偉業を述べる際には三尺の剣をもつて天下を取ったということがよくいわれる。彼がまだ天下統一を果たす前に、この剣をもつて大蛇を斬ったエピソードが、今回取り上げる宝剣伝説である。蛇を斬ったということで、一般に斬蛇剣といわれる。

この伝説は、後に剣の神聖性を述べるにあたって頻繁に引き合いに出され、その例をあげれば枚挙にいとまがない。結論を先取りすると、呉越の宝剣伝説とは異なり、斬蛇剣の出自を語るこの伝説自体に思想的な奥深さはない。しかし、**日本のヤマタノヲロチ神話との類似性が指摘されるなど、後世の刀剣思想を考えると、重要であることは間違いない。**

▼高祖劉邦

今回は、高祖の斬蛇剣の伝説について注目するが、まずはこの高祖という人物を知ることからはじめたい。

ここでの高祖とは、漢王朝の創始者で

ある劉邦のことである。

沛（今の江蘇）の人で、姓を劉、名を邦、字を季といい、農民の家庭に生まれた。父は太公（大日那）、母は劉媪（劉家のおかみさん）と伝えられるだけで、実名は定かでない。

英雄の出生にはさまざまな逸話がつきも



“竜”の思想

* 蛟竜：まだ竜とならない蛟（みずち）という想像上の動物

刀剣の歴史と思想

第5回「高祖の斬蛇剣」



高祖劉邦（『晩笑堂画伝』より）

のである。母の劉媪が湖のほとりでうたた寝をしていたとき、竜神に出会った夢を見た。ちょうどその時、雷鳴がとどろき、父太公は劉媪のいるあたりの上空に蛟竜[＊]の姿があつたのを見たという。その時に身ごもった子が高祖であるという。

高祖は、若いころは家業の仕事を嫌い、酒色を好む生活をする任侠の徒であつたという。酔って寝てしまうと、その上に竜が姿を現したという逸話もある。

秦の時代の中国では、亭^{てい}という地方の行政区画を設けていたが、高祖は壮年にいたると泗水^{すいすい}という亭の亭長に就任した。しか

し、仕事ぶりの評判は良くなかった。この時期に、高祖の将来を決定づけるかのような重要なエピソードがあり、これが伝説となつて今に伝えられている。これが今回の主題であるが、まずは話を先にすすめて、詳細は後に譲る。

労役の監督で咸陽^{かんやう}に行った時、たまたま当時中国全土を統一支配していた秦の始皇帝の行列に出くわし、これを見た高祖が「男たるもの、こう成らねばならない」と言つたという話は有名である。この頃すでに、志を高くもつていた。

始皇帝が亡くなると中国全土で群雄なら

びおこり、高祖劉邦も挙兵する。最後は楚の項羽^{こうう}と覇権を争い、垓下^{がいか}の戦いに勝つて天下を統一し、紀元前二〇二年に前漢王朝を創立した。

高祖斬蛇剣の伝説

いよいよ高祖斬蛇剣の伝説に目を向けていきたい。

高祖の生涯およびそのエピソードについては、『史記』の高祖本紀に記されている。

『史記』とは、前漢の頃に著された全百三十巻からなる中国最初の通史である。一般的には司馬遷^{しばせん}一人で著したと考えられている場合が多いが、実際には父である太史談^{たいたん}が着手した修史事業を子である司馬遷が完成させたものである。

秦朝は、始皇帝の酈山陵^{りざんりやう}を造営するために、全国から囚人を人夫として集めていた。高祖は、泗水の亭長の頃、この囚人を護送する任にあたっていた。高祖斬蛇剣の伝説は、その時の話である。

以下、『史記』の記述である。



高祖、亭長を以て、懸の為に徒を酈山に送る。徒多く道より亡ぐ。自ら度るに、至る比ほひ、皆之を亡はんと。豊西の沢中に到り、止まりて飲す。夜、乃ち送る所の徒を解き縦ちて曰く、公等皆去れ、吾も亦此より逝らん、と。徒中の壮士、従はんと願ふ者、十余人。

受刑者を酈山に護送する途中、多くが逃亡したため、このままでは目的地に着くころにはほとんどがいなくなってしまうと判断した高祖は、豊西の沼沢地帯に着いたところで進むのをやめ、囚人全員を解放した。自分も逃げる決意であった。血氣盛んな者で、高祖に従うことを望む者が十数名残った、といった内容である。

以上のような場面設定のなか、話は以下のように進む。

高祖、酒を被り、夜、沢中を徑し、一人をして行前せしむ。行前する者還りて報じて曰く、前に大蛇あり、徑に当る。願はくは還れ、と。高祖酔ひて曰く、壮



高祖劉邦が大蛇を斬ったと伝えられる場所に建てられた碑（河南省永城市）〈写真提供＝山口直樹氏〉



この後が重要

刀剣の歴史と思想

第5回「高祖の斬蛇剣」

士行く、何ぞ畏れん、と。乃ち前みて剣を抜き、撃ちて蛇を斬る。蛇遂に分れて兩と為る。徑開く。行くこと数里、酔ひて因つて臥す。

高祖は、酒を飲みながら沢中の夜道を進んでいたが、先行していた者が引き返してきて言うには、「この先に大蛇がいて道をふさいでいるので戻りましょう」と。高祖は、酔いにまかせて「壮士が行くのに何を畏れることがあるか」といつて進み、剣を抜いて蛇を斬った。高祖は、さらに数里進んだところで酔って寝てしまった。

これが、後世非常に有名になる高祖斬蛇剣の出自である。

斬蛇剣伝説に潜む

モチーフ

しかし、ここまでの部分で、この伝説の重要性はまだ見えてこない。この後、漢帝国の創始者となる高祖劉邦にとってこのエピソードが重要であることを語る部分が続く。

後るる人來り、蛇の所に至る。一老婆有り、夜哭す。人問ふ、何ぞ哭する、と。嫗曰く、人、吾が子を殺しぬ、故に之を哭す、と。人曰く、嫗の子、何為れぞ殺されたる、と。嫗曰く、吾が子は白帝の子なり。化して蛇と為り道に当れり。今、赤帝の子のために之を斬られぬ。故に哭す、と。人乃ち嫗を以て誠ならずと為し、之を笞たんと欲す。嫗因つて忽ち見えず。後るる人至る。高祖覺む。後るる人、高祖に告ぐ。高祖乃ち心に独り喜び自ら負む。諸々の従う者、日に益々之を畏る。

後れてきた者が蛇がいたところに至ると、老婆が我が子が殺されたといつて泣いていた。その子は白帝の子で、蛇に化けて道をふさいでいたら、赤帝の子に斬られたという。いい加減なことを言っていると思った男は、老婆を鞭で打とうとしたが、そのとたん老婆は消えてしまった。男は、高祖に迫りついてこのことを報告した。これを聞いた高祖は、内心一人喜んだという。従う者は、日に日に高祖に対する畏敬の念を深めていった。以上のような内容である。

この描写において記されている老婆の言葉は、あることを暗示している。ここでの白帝の子の化身である蛇とは秦の始皇帝のことを例えており、これを斬った赤帝の子は高祖のことである。つまり始皇帝にかわって天下を取るのが高祖であるということとを、この老婆は暗に語っているのである。

ここには、一つの中国に固有の思想が潜在している。それは五行思想といわれるもので、木(青)・火(赤)・土(黄)・金(白)・水(黒)の五元素が一定の法則に従って循環交代するという説である。この思想においては、相生と相剋の二つの理というものがある。そのうち相剋の理とは、「木剋土」「土剋水」「水剋火」「火剋金」「金剋木」といつて、それぞれ前者が後者にうち剋ちつつ現れるとする考え方である。このうち「火剋金」は、火は金にうち剋ちつつ現れる。これを色でいうと、赤は白にうち剋ちつつ現れる、ということになる。つまり赤帝の子(高祖)が白帝の子である蛇(秦の始皇帝)を斬ったというのは、五行思想でいうところの相剋の理に適っているということである。五行思想のこのつと

白帝の子 = 蛇 = 始皇帝

↑ 斬る 中国統一の予言

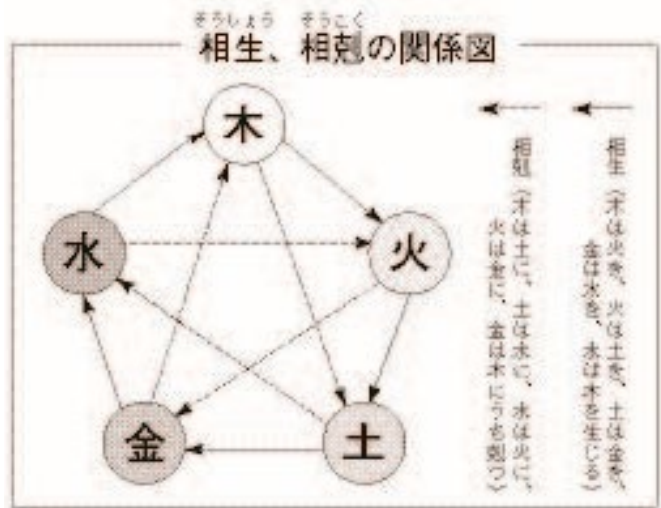
赤帝の子 = 高祖

相克の理に適っている

天子の気

この記述の後に続く部分で、始皇帝は、高祖のいる方角に天子の気があるとして嫌い、これを鎮めようとした。高祖はこれを知って山に隠れる。しかし、高祖の居る辺りには常に雲気が漂っており、近しい者には、容易にその居場所がわかったという。これを聞いた高祖は、これこそ天子の気であるとして、またしても一人喜ぶのである。いたって権力闘争にまつわるモチーフをもちながら話が展開されている。

つて、高祖は始皇帝にかわって中国を統一支配するという、いわば予言である。そのために高祖は、内心一人喜んだということである。



バックボーンとして 潜在する天命思想

ここで少し、刀剣の思想の立場からこの宝剣伝説について考察を深めてみたい。後に神秘化されて語られるこの斬蛇剣は、当初から優れた力をもっていたのだろうか。つまり斬蛇剣の出自を語るこの伝説の段階で、高祖はこの剣があつたからこそ

秦王子嬰奉る所の白玉璽、高祖白蛇を斬りし剣を以てす」(漢の皇帝は、秦の王であつた子嬰の玉と、高祖が白蛇を斬つた剣を代々受けついだ)と記されているのは、そのことである。ステータスシンボルとしての剣

大蛇を斬り天下を取れたのだろうか。このことを解き明かすヒントが、高祖の遺言にある。以下、「史記」に記されている高祖死の直前の言葉である。

吾、布衣を以て、三尺の剣を提げて天下を取れり。此れ天命に非ずや。命は乃ち天に在り。

私は、無位無官の平民の身から、三尺の剣をもつて天下を取った。これこそ天命ではないか。運命は天にある、といった内容である。

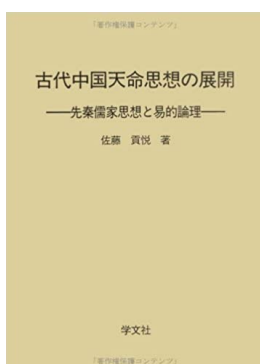
ここでは楚王が太阿の名剣をもつて晋の大軍を打ち破ったときのように、その功績を「剣の威」によるものなどとは言わない。剣の神威が持ち主に優先して語られるようなことはない。あくまでも天命によるものだという。

ここでいう天命とは何か。

中国人は天を絶対的なものとして考え、氣候から農作物の出来具合、戦争の勝敗、ひいては誰が王朝の皇帝となるかといったことまで、地上で起こることは全て天の意

天命の優位

佐藤貢悦『古代中国天命思想の展開』1996



志によって決められていると信じていた。世の中の全てのものを主宰する絶対者を、垂直上方向に求めるのは、いたって大陸的な思考と思える。広大な陸地が水平に果てしなく続く大陸において、超越者を頭上高く求めるのは自然な成り行きであろう。

この天の意志を天命といい、これを絶対視する考えを天命思想という。

高祖が天下を取れたのも、この天命によるものだと言いきっている。この伝説の主たるモチーフは権力闘争であるが、この権力闘争に決着をつけたのはやはり天命であると高祖は考えていた。つまりこの段

階では、高祖はこの三尺の剣ではなく他の剣をもつても、天命により蛇を斬って天下統一を果たしたであろう。

当初、高祖の剣は、後世語られるほど神秘的な力をもつものではなかったということである。

武器としては優れていたであろうが、所有者である高祖の力をもしのぎ、ましてや天命にも優先するほどの威力をもったものとしては考えられていなかった。後に神秘化されて盛んに語られるようになるのは、やはり中国を代表する権力者となった高祖劉邦が所有し使用していたものだからだろう。であるからこそ漢帝が代々伝えるス

テータスシンボルともなった。この剣に対する思想形成の順序としては、こう考えるのが妥当である。

この段階で、斬蛇剣に思想的な深みはない。しかし、日本も含めて、後世、刀剣の思想において非常に重要となる。

〈註〉

(1) まだ竜とならない蛟みずという想像上の動物。

(2) 『西京雜記』巻第一

(3) 唐の時代に著された『晋書』などには、斬蛇剣がひとりでに飛んで行ったというようなマジカルな描写もみられる。

